

はじめに

学長 松田 幸子

このたび総合文化学科では『文化の諸相』という一冊の本を出版することになった。平成16年度に現学科名となってから2年、このような本の出版ができたことはまことに喜ばしく、関係者各位の努力に敬意を表する次第である。

この本の書名にも『文化の諸相』とあるように、文化という言葉はいろいろな意味で私たちの生活のなかに入ってきている。文化勲章、文化功勞者、文化国家、文化人、文化人類学などと使われているし、伝統文化、日本文化、稲作文化、西洋文化などという言葉も馴染みぶかい。しかし文化祭、文化会館、文化住宅、文化鍋などというものになってくると少タイメージが怪しくなってくる。

ところが文化という言葉は平和的で知的、優雅さをともなっているので、多くの人に愛されているようである。東京のお茶の水には、文化学院という有名で伝統ある学校もあるし、本学にも総合文化学科という学科がある。

誰でも知っているように、文化とは英語のculture、フランス語のculture、ドイツ語のKultureの訳語で、耕作するという意味の動詞cultivate（英語）、cultiver（フランス語）、kultivieren（ドイツ語）に由来している。そしてこれらの言葉は、ラテン語のcultus（耕作、耕作地、世話、生活習慣）という言葉を経由している。

ドイツやフランスなどの中部ヨーロッパを旅行していると、私たちはどこまでも続く広い肥沃な農地を目にすることができる。しかし最初からヨーロッパに肥沃な農地が広がっていたわけではない。

西暦476年に西ローマ帝国を滅亡させたゲルマン民族の住んでいたヨーロッパは、森に覆われていた。1世紀の終わり頃から2世紀の始めにかけて活躍した古代ローマの歴史家タキトゥスは、その頃のヨーロッパの地勢について次のように述べている。

土地はその姿に幾分の変化はあっても、総対的には森林に蔽われてもの凄いか、あるいは沼地が連なって荒涼たるもの。・・・土地は農産には豊

饒であっても、果樹を生ずるに堪えず、また家畜には豊富であっても、その体はおおむね小さい（タキトゥス『ゲルマーニア』泉井久之助訳註、岩波文庫、2004年）。

泉井の註によると、上に述べられたようなことは現在のオーストリアの大部分を含む地方の様子である。

また西洋経済史、西洋文化史で有名な増田四郎は、西ヨーロッパ地域の特徴について次のように述べている。

この地域は一般的にいて、夏は涼しく冬も緯度が高いわりあいに気候は温暖である。さらに雨量は一年中ほぼ平均している。そのため、ここには針葉樹林と広葉樹林、そういう植物が多様に混合して繁茂する。少なくとも中世いっぱいには、きわめて豊かな森林があった。ゲルマン人というのは森の人だといわれている。あるいはゴシックの建物は森の印象からくる芸術だといわれるように、森を抜きにしては考えられない地域なのである（増田四郎『ヨーロッパとは何か』岩波新書、1967年）。

増田によると12、13世紀以後、これらの森林や河口地帯、沼沢地帯は開墾、干拓されて耕地や牧草地、牧場が激増し、気候が温暖であるために小麦、ライ麦、裸麦などの穀物、野菜など、地中海世界とは比較にならないほど多くの農産物が生産される肥沃な地域になったということである。

このように見てくると、森を切り開いて農地を作り、それを耕すことによってヨーロッパの人々の文化が築きあげられてきたことが想像できるし、文化という言葉が耕すという言葉に由来していることもまたうなづけるであろう。もちろん現代ヨーロッパ文化は農耕だけではなく、キリスト教の大きな影響を受けていることは言うまでもない。

日本において最初に倫理学を体系づけた哲学者和辻哲郎は、昭和35年に文化について次のように書いている。

「文化」は「自然」に対する言葉である。自然を材料として、そこに何らかの人工を加え、それを一定の「価値あるもの」たらしめる過程が文化なのである（日本の文化についての序説『和辻哲郎全集』第20巻、p.474、岩波書店、昭和38年）。

和辻はまた同書の中で、人類の文化の始まりについて、石器と火の使用を例にあげている。それによると、自然物であった石を目的に適合するよ

うに加工して新しい状態にしたのが石器という道具であるという。さらに落雷や火山の噴火によって火を獲得し、最初はそれを保存していたが、やがて人は木をこすりあわせることによって火を作りだせるようになったというのである。しかし人類にとって最も大きな文化は言語であった。言葉があったから互いに意志を通わせ団結し、大きな動物を狩ることができたのである。そしてそれは社会を作り、さらには国家へと発展できたのである。

道具と火と言語こそが人類文化の基本であると和辻は説くのである。このようにして人類文化が発展し、森は切り開かれて農地や都市になり人々が豊かに暮していれば問題はないのであろうが、現代のように科学が進歩してくると人々の欲望はとどまるところを知らないようにさえ見えてくる。科学者は自然界に存在しなかったプラスチックやプルトニウムのような人工放射性元素まで作りだしてしまったし、遺伝子組み替えやクローン技術は生命の尊厳まで脅かしかねないところまでできているようである。科学者だけが悪者というわけではない。自動車を日常的に運転している一般の人々も、エネルギーの浪費や地球温暖化には大きな責任を感じてもらわなければならない。そこで文化の発展とは何かということを、今一度考えなおさなければならないような気がしてくる。

この場合もっとも大切なことは、文化の発展が人間の幸福と結びつくものでなければならないということである。人間の創りだす文化というものは、時には人間を疎外する可能性も持っているので、文化の倫理性というものも考えなければならない。